16　次の文章を読んで、問１〜５に答えよ。〈神戸大〉　二〇一五年度出題

　私たちの周囲にに関する情報が少なくなった、と感じるようになってから久しい。むろんそれはたんに情報の量の問題ではない。それを伝えようとする様々の努力がなされていることや、問題はまったく解決していないことは知っていながら、私たちの大部分の生活の中にそれは入り込んでこない。このすさまじい消費社会は「水俣」の意味をも消費しみこんでしまうのだろうか、というが頭をもたげる。と同時にこれは、水俣の人たち自身にとっても容易ならない事態ではないか。

　ここに一本の映画が提出された。小池たちによる『水俣の甘夏』である。この映画は、水俣特産の甘夏を無農薬の有機農業で栽培することをめざす、水俣病患者家庭果樹同志会の活動を広く伝えようとする意図のもとにつくられた。ところが、その制作過程でこの意図をくような事件が起きた。同志会のなかの六戸の農家が、無農薬をめざす活動に逆行するような除草剤を使用してしまったのである。映画はこの事件を見事に「記録」する。それによって、この映画は傑作となった。

　除草剤の使用は、まさしく失敗であった。それは言葉の本来の意味において失敗であった。その事件をめぐる過程全体を通して、さまざまの屈折と渋滞と逆流とを伴いながらも終始、それが失敗としてけだされ、抱えこまれつづけたことが私たちの胸をうつ。事件への対応に苦慮し、内面のを経たのちにる農民がもらす「落ちこぼれじゃなかですもんね。失敗したから失敗の会ちゅうわけです。人間だから失敗もあるじゃろう」というそれ自体は変哲のない言葉が、る者に突きささってくるのは、ア私たちの生きる世界に「失敗」がいかに成り立ちにくくなっているかを、それが鮮明に浮き彫りにするからである。

　安楽と効率を指向し、そのための計画とプログラムによって覆いつくされた社会生活においては、そのプランの実現をみ害すると考えられる事態は極力、遠ざけられ回避されなければならない。そういう事態を招いてしまった者やその渦中で苦しむ者は、プログラムに対する見通しの甘さと計算能力の不足を示すにすぎないのであって、まさに社会の「落ちこぼれ」として片づけられざるをえない。ここでは、人間の生きる世界が本来、「思いがけない」出来事や「思いもよらない」物事を含み、「思いどおりにならない」存在を組みこむものであることが的に否定されてしまう。したがってまた、自分の予測やや統制の能力を超えた、未知の物事によって挫かれ、驚きとともにその事態を受けいれること、すなわち失敗が社会的に成立しえないのである。

　こういう社会では失敗は、機械化された世界にしく、いわば事故や故障としてしか現れない。つまり修理や部品交換や解体処理を要請する、もっぱら有害な事態としてである。そこでは、機械の故障と違って人間の失敗はの一方向ではありえないことや、また機械には消耗をひきおこすだけの時間の経過が人間には成熟をもたらしうることなど、考慮の外へと放逐される。こうして失敗は何よりも、社会の規格化された方式では処理できない現実、そのかぎり苦痛で不快な現実に面と向かわせる故に、れをもって排除されるのである。

　除草剤事件をめぐる同志会の人達の苦悩や葛藤は、この社会の圧倒的なとは的な関係を形づくっていく。除草剤使用者すなわち失敗した者を、追放したり排除したりしない関係をいかにしてつくるかというかれらの苦慮と、ついにそれを人間本来の生産的失敗として包摂するに至る経過と、さらにそれを自他に対して公開する勇気とは、失敗などは有害なだけのものとして排斥することによって一身を保守しようとする、現在の実利的世界となんと違っていることか。その苦渋にみちた過程は、単線的ではありえない。炎天下に自分達が汗水流して草を刈っているときに、安易に除草剤を使った者たちへの。生産者個人として自らの生産物への責任をとるべきだという主張。再考を促す水俣病センター相思社のメンバー（そして映画制作者たち）に対して、生活者の名のもとに表明される感情的なズレ、等々。「会の四十八人を同じ気持にさせきらん」という焦慮とともに、ともすれば失敗者に対する裁きと分裂へと⒜ケイシャしかねない心的条件に動かされながら、しかも同志会に、最終的にそれを乗り越えることを可能にしたのは、ほかでもない、自分達は水俣病患者であるという認識の一点であった。映画は、この認識がかれらにとっても決して自明のものではありえないことを示している。いいかえれば、ナレーション抜きではあるいは水俣とはらないかもしれないほど、水俣病の日常のなかの不可視の部分を映しだそうとしたこの映画が、まさしく水俣の映画たりえているのは、実はここにおいてである。

　生産者であり生活者であると同時に、かれらは患者なのであった。少数の失敗者を裁きかけ排除しかけている自分たち自身が、実は少数者として社会の辺境に放置され排除されようとしている。ここで患者であるとは、そのことに気づかせる、いわば認識衝動を生みだす母胎であった。無農薬をめざす作業自体が、被害者である自己が農薬をする加害者へと転化することを、何とか克服しようとすることから出発したであった。ここには、不断に相互転移や逆流を含む社会関係の連鎖の中に自分たちは身を置いている、という認識が形成されようとする。社会の多数派が持ちがちな、地位と役割の固定性という虚偽の意識が打破されようとする。したがって、相互の転移や反転に伴ってわになる人間の弱さを、率直に承認していく精神態度が生みだされようとする。

　こうして、失敗を否定し放逐するという社会的趨勢の再生産から、かれらを最後のところで踏みとどまらせ、ついにはそれを人間に本来的なものとして包みこむ関係を組みなおしていく、という感動的な逆転をもたらしたのは、水俣病患者としての経験であった。すなわち、被害者だからこそ加害者性を克服しようとし、少数者だからこそ排除者となることを拒絶しようとする。そして理不尽に負性を背負わされた者だからこそ、失敗者を切り捨てず包容しようとするのである。人間の生活とはこのように相互的なものであり、それぞれの錯誤や失敗が孤立したものとして切り離されず、生かし合う関係によって支えられているとすれば、社会の多数派は本当に「生活者」たりえているのだろうか、という反省をそれは促す。

　除草剤の使用という一つの失敗が、同志会の農民達の立脚地点を明るみに出し、社会的価値の逆転のドラマを生んだ。それは、除草剤事件が、真に一の事件として成立し展開したということでもあった。「事件」は当事者それぞれのかかえる事情と、かれらが関与する場の断面を鮮やかに切り開いてみせる。水俣の日常を捉えたこの映画の各ショットが、除草剤問題という事件を通して集約され再組織されて、かれらの立っている「現実」の諸局面をらかにするのである。そこには何よりも、水俣病によって海から陸へ追われた人達の、たえず海へ引き寄せられる激しい思いがある。さりげなく挿入された漁の光景がかれらの⒝キョウシュウを照らし出す。漁につよい愛着を抱く人達にとって、長期の心配りと手入れを不可欠とする農業は辛い仕事であり、「草取りなどは女の仕事」にすぎなくなってしまう。つまり農業の経験不足がもう一つのとなる。そして無農薬をめざす有機農業が、樹木の生命力をらせることによって作業量を増やす結果、かれらは病気の苦痛に加乗されながら、ささやかな「安楽と効率」の誘惑に直面することになる。そこには同志会の組織としての不充分や不徹底の部分も、明るみに出されることになるだろう。

　事件はこうして、当事者がかかえこんでいる前提条件と諸関係の網目模様を、いわば目に見えるものにした。そして、それに応答することを通して、かれらは自らの立脚基盤の⒞ソセイ構造を変えることができたのであった。日常の中のと可逆的な相互関係と内面的葛藤とそして他者性の包摂とを含む、この緊張した過程はまさしく劇的であって、イ今日なお可能な劇的なるものの表出とはこのようなものであるのか、と思わせるほどである。そしてまた、私たちの生活の周囲にも実は「事件」は起きている筈なのであって、社会全体の機構とそれにもたれかかる私たちの生活様式とが、挙げて事件を不可視にしし消去していることに思い至らせるのである。「不意打ち」を追放せず応答できる、このような関係こそが社会関係の名にするとすれば、現在の私たちの社会はそれにうから敵対するだろう。

　除草剤事件が当事者それぞれの場を切開してみせたというとき、その当事者とは実は映画制作者を含むものであった。映画はその事件に遭遇したことによって、自らの性格を変容せざるをえなくなった。そうして、その遭遇による変質を見事になしとげることによって、偶発性を社会的に生かすことが出来た、といってよい。事件に際会したカメラいは事件をつきつけられたカメラは、それをどう撮るかが試されざるをえない。水俣の人達にとってと同じように、事件は映画制作者たちにとっても試煉であった。カメラの介入は、当事者に逃れがたく事件をつきつけるだけでなく、それによって顕らかになっていく諸断面を映しとることを通して、事件そのものの性質を変えざるをえない。同志会が「公開」を原則としていこうとすれば、一層そうであった。それは同時に、自らの介在によって変容をとげた現実を撮ることになる、映画自体の変形でもあった。ウ映すべき現実の動きとともに、この映画は身をよじる。カメラが、多方向で不確定の諸要素を含む事件の展開に内在的に関わりながら、現実の新たな次元を顕らかにしていくとき、それはたんなる「参与観察者」にとどまるわけにはいかないだろう。ここでは事件を「記録」することと、それを変形すること或いは「創る」こととは別のものではない。

　誤解をおそれずにいえば、ここでは、映画が記録することを通して「現実」を創っていったのである。その限りでこの映画は、カメラを開き放しにして映るものを捉えると称するいの「記録」映画とは、正反対の行き方を示している。映される現実と当事者関係に立つことによって、この映画は現実を記録するということのいわば初発の地点を明らかにしているように思われる。それは自らを内在させることで、表層を構成する⒟イクエもの現実を映し出すのである。たとえば、「誰にも打つ手がなかった」というナレーションとともに現れる、事件発生後三か月間の空白が、画面に映らない人間関係のきしみを観る者にスリリングなまでに想像させるのも、そして、カメラワークはむしろ静態的であるにもかかわらず、画面自身がきしむ印象をもたらすのも、おそらくそこに起因する。したがって、この映画は映像が担うメッセージにもとづく的な告発によってではなく、むしろ表現形態それ自体において、観る者をたんなる観客にまらせない力を帯びるに至っている。

　こうして、除草剤事件を通じて、同志会と相思社とそして映画制作者たちとがコンテキストを作り合うところに、失敗をめぐる一連の過程、その新たな現実に対する発見の驚きと対面の苦痛とを伴う過程は普遍的な経験として結晶することになった。これまで⒠チクセキされてきた水俣病患者としての経験を、事件に対する最終的な判断のり所として集約させたとき、そこに、かれら自身を超えて、照らし出し動かす普遍的経験が成立したのである。その故に、それは映画を観る者につよく働きかけ、揺さぶり、そして励ます。この映画は水俣の人達とともに、それ以上に観る者を励ます力を担っている。「失敗の会」のシールをって甘夏を出荷する場面に端的に見られるように、ユーモアの余裕をもそれは含みこんでいるのである。と同時に、それが事柄の総体に関わる経験として提出されているかぎり、自分に都合のよい部分だけを切りとって処理するわけにはいかない。つまり日常私たちが営んでいる方式が通用しない、質的に異なる「現実」がここに開き示されている。

　甘夏という具体的なものの成熟過程を描き出そうとすることを通して、この映画は、それにしうる人間的成熟の可能性を映し出すことになった。すなわち、水俣病をめぐる受難と受苦の直接形においてではなく、生きた経験の結晶を用意し可能にした基盤としての受苦に思い至らせるという形で、私たちに、そして水俣の人達自身に、「水俣」を提示するのである。エここに水俣病は「人体」の問題にとどまらず、まさに「人間」の問題として立ち現れることになる。 （市村弘正『標識としての記録』所収「失敗の意味」より）

〔注〕　○『水俣の甘夏』―─一九八四年に製作された映画。

○水俣病センター相思社―─水俣病の諸問題に対処するために一九七四年に設立された団体。

○同じ気持にさせきらん―─同じ気持ちにさせることができない、という意味の方言。

問１　傍線部⒜～⒠を漢字に改めよ。はっきりと、くずさないで書くこと。

問２　傍線部ア「私たちの生きる世界に「失敗」がいかに成り立ちにくくなっているか」とあるが、これはなぜか。八〇字以内で説明せよ。

問３　傍線部イ「今日なお可能な劇的なるものの表出」とあるが、これはどういうことか。八〇字以内で説明せよ。

問４　傍線部ウ「映すべき現実の動きとともに、この映画は身をよじる」とあるが、これはどういうことか。八〇字以内で説明せよ。

◎問５　傍線部エ「ここに水俣病は「人体」の問題にとどまらず、まさに「人間」の問題として立ち現れることになる」とあるが、これはどういうことか。本文全体の論旨を踏まえたうえで、一六〇字以内で説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　⒜＝傾斜　　⒝＝郷愁　　⒞＝組成　　⒟＝幾重　　⒠＝蓄積

問２　Ａ安楽と効率を求め、計画性を重視することが一般化した現代社会では、Ｂ予想外の事態を招く失敗は、対処不能な苦痛で不快な現実に直面させるものとして忌避されるから。（７７字）

Ｂがなければ全体０。

Ａ＝４

Ｂ＝６〔「忌避される」は「排除される」でも可。〕

問３　Ａ想定外の困難な状況において自己を再認識し、価値観を改変しつつ周囲との関係を築き直すという緊張と感動に満ちた過程が、Ｂ実利的な現代社会の中でも起こりえたということ。（８０字）

Ａがなければ全体０。

Ａ＝６〔「失敗を否定せず向き合う中で」など具体的に述べても可。〕

Ｂ＝４

問４　Ａ除草剤事件という失敗を内部から撮影したことでＢ映画制作者自身も事件の当事者の一人となり、Ｃ事件の変容と共に Ｄ映画自体も現実を創るものへと変質していったということ。（７８字）

「事件の変容」が「映画の変質」につながることが書けていること。

Ａ＝２／Ｂ＝２／Ｃ＝２／Ｄ＝４

問５　Ａ水俣病は第一に健康被害を受けた患者の直接的・身体的な受苦であるが、Ｂその病ゆえに彼らは無農薬の甘夏づくりの失敗という経験を通して、社会的連鎖の中での自己のあり方を捉え直すことができた。Ｃそしてその姿によって我々も、失敗の克服というものが大きな苦痛を伴いながらも人間の成熟をもたらす普遍的経験だと再認識できたということ。（１５７字）

Ａ＝３／Ｂ＝３／Ｃ＝４　※「普遍的経験」とは、「失敗を排除しがちな現代社会にも通じる経験」のこと